【 1 】

氏名	山 根 智 恵
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	文　　学
学位授与番号	博甲第２０２６号
学位授与の日付	平成１２年　３月２５日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 （学位規則第４条第１項該当）
学位論文題目	現代日本語の談話におけるフィラー
論文審査委員	教授　下河部　行輝　　教授　工藤　進思郎 教授　辻　　星児　　助教授　江口　泰生 大阪大学文学部教授　前田　富祺

学位論文内容の要旨

本論文は、現代日本語の話し言葉に特有の現象であるフィラーを、音声面からの観察、談話上における位置、談話の種類等さまざまな観点から分析し、その機能を解明しようとしたものである。内容は、既発表の論文、及び学会発表を基として、新たに分析した資料を加味して全体を統一した論文である。

この論文の構成は、第１章の研究の目的から始まり、第８章のまとめと今後の問題に至り、参考文献及び付録として談話資料を加えたものから成る。

第１章　はじめに

文より大きな単位である談話が言語学の分野で研究されはじめた1980年代から書き起こし、日本では国際化に伴って日本語教育が盛んになり、欧米の研究が紹介されるようになったのは1970年代半ばで、その一つがアメリカの社会学の一潮流であるエスノメソドロジー(ethnomethodology)の立場から会話分析を行った、サックス・シェグロフ・ジェファーソン (Sacks ・Schegloff ・Jefferson)であることを指摘した。以下順次談話に関した研究の紹介をし、これらの紹介された理論や方法を、従来の日本での研究が、日本語の談話で確かめられたものだけで、体系的見通しに欠けていることから、フィラーの定義と研究対象の談話の種類の特性について述べ、以下の研究分析の出発としている。

第２章　先行研究概観

27節にわたって、講演の談話から始まり英語のフィラー研究にまで及ぶ。まず、談話の構造に関する先行研究では、談話・留守番電話・対話・電話の研究を紹介、続いてフィラーに関する先行研究を日本における全てを紹介し、さらに英語によるフィラーの研究に及び、逐一長所、短所について詳述している。

第３章　講演の談話におけるフィラー

この章から、第６章まで談話・留守番電話・対話・電話におけるフィラーについての考察がなされる。まず、この章の談話については、フィラーの定義をしっかりとした後、フィラーの種類を母音型、あいまい母音型、エート型、ンー型、コソア型、コーソー型、マ

ー型、モー型、ナンカ型、ネー型からハイ型まで11種類に分類する。こうしたフィラーの現出する八つの資料の説明を詳細にして、談話の構造を開始・中心・集結部に分け、11分類のフィラーの異なり76種類、延べ7,824 例について、音声面、出現位置、役割、位相とフィラーに関して考察している。談話においては、「コー」（ 講演者の領域に引き込む ）「モー」（ 講演者の感情移入 ）「ネー」（ 聴衆へ呼び掛ける ）「アノ （ー） 」（ 発話内容を適切に伝える言語形式の検討 ）の出現頻度の高さを指摘している。

第４章　留守番電話の談話におけるフィラー

この章では 160の談話における441 のフィラーの分析をしている。これらは聞き手の反応をまったく得ることが出来ない特殊な談話におけるフィラーである。単純な構造の発話が多いが、自分の発話を調節しながらの話の進め方であるので、ハイ型、フィラーの前の母音と結びつきが深い母音型が発話の途中に使用される確率が高い。非対面のためモダリテイ形式の付加が少ない。談話のように構造を三つに分けて、その中心部となるところに「エート」型のフィラーが多く出現する。フィラーが出現しない談話は、時間の短い談話、呼びかけの多い談話、パターンの決まった談話であるという結論を導いている。

第５章　対話におけるフィラー

これは情報の流れが双方向である談話である。これは物理空間を共有するものと、メディアを使用して物理空間を共有しないものと二つに分かれる。対話におけるフィラーは、二人の話者の心的関係を円滑に保つ、また構造の段階や発話の境界を示すという二つの大きな役割を担っていると考えている。そのため「アノ （ー） 」「マ （ー） 」の頻度が高く「エー」「エート」系のフィラーは、出現度が少ない。

第６章　電話の談話におけるフィラー

前章と同じく情報の流れが双方向である談話である。特に電話は携帯電話とともに今後のコミュニケーションの重要なメディアになるものであるとしている。沈黙は相手を不安にするので、相槌が多用される。談話の型は問い合わせ型と雑談型の二種類となる。構造は開始部、中心部、集結部と進むパターンが出来ていて、開始部では「ア」が多用される。中心部は「エート」型、「ア」、「アノー」「マ （ー）･」「モ （ー） 」などのフィラーが現出する。集結部はあまり表れず「ハイ」が見られる程度で、気付きのフィラーとしての「ア」は使用する必要がない。

第７章　談話の種類とフィラー

第３章から第６章までの談話の類似点・相違点を、音声面、発話・談話上の位置、役割、属性との関わりから考察してそれぞれの談話の特性とフィラーとの関係を論じている。

音声面では、従来述べられていない平板に発音されないものについて考察をしている。それらは４拍以上相当のフィラー、モダリティ形式が付加されたフィラー、ナンカ型であるとしている。又音声面の特徴として母音や鼻音で始まるフィラー、母音を延ばした音を持つフィラーが頻出する。出現位置は談話の種類に関わらず途中が最も多い。談話差が見られるのは副詞の後である。助詞でも接続助詞の後が多い。またフィラーは談話構造の段階の変わり目や発話・発話節の境界を示す標識になっていると判断している。属性については従来触れているものがほとんどないが、ここでは性別、改まり度、年齢、役割、個人差、発話量について分析しており、結果として属性との関わりはほとんどないとしている。談話の種類との関わりは特徴的なフィラー、フィラーの出現しやすき位置などがあり、種

類によりフィラーの出現頻度や種類は異なることを指摘している。

第8章　おわりに

この章は、まとめと今後の課題となっている。基本的にフィラーとは何かということから論を展開させている。結論として音声断片にすぎないものと、言語形式として認識可能のものとの2種類に分類できるとしている。しかしながら、フィラーが単なる「音声現象」なのか、「言語形式」なのかは研究者によって完全な一致を見るのは難しいことで、言語形式であれば、品詞分類ではどこに位置づけるのかが問題となり、「間投詞」か「感動詞」かという見方も一部分は出来るが全てのフィラーではなく今後の研究を俟つとしている。さらにフィラーは、言い誤り、独り言、ポーズなどとの類似点や相違点についても探るべきとしている。また、言語学だけではなく、心理学・情報工学・医学などの知見も多く採用する必要があることを強調している。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

学位審査会は、2000年2月1日、学内審査委員4名・招聘審査委員1名によって行われた。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、話し言葉に特有の現象であるフィラーを、音声面、談話の種類、談話上の位置、役割、属性等のさまざまな観点から観察・分析して、その機能を解明しようとしたものである。先行研究に於て、このフィラーは「遊び言葉」「言いよどみ」「ヘジティション」等と呼ばれてきたが、本論文では基本的に「それ自身命題を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にならない、発話の一部分を埋める音声現象」と定義して、数量的なデーターを伴って考察したものである。このフィラーを「母音型」「あいまいな母音型」「ンー型」「エート型」「コソア型」「コーソー型」「マー型」「モー型」「ナンカ型」「ハイ型」「ネー型」の１１種類に分類し、それぞれの機能について考究している。特に従来の先行研究にはない特色として、次の3点を挙げることが出来る。

（1）フィラーの音声面について考察していること

（2）講演会の談話（8談話、フィラー数5514）、留守番電話の談話(160談話、フィラー数441)、対話の談話（8談話、フィラー数1376）電話の談話（ 8談話、フィラー数493)という4種類の談話資料を用いて、一方方向と双方向の談話、空間を共有する・空間を共有しない談話の種類とフィラーとの関わりについて考察していること

（3）談話を全体構造と関わらせて、その上でフィラーの機能について考察していること

これらの談話について、構造を分析し、上述のフィラーの分析を行っている。その結果、（1）については、平板の発音が多いこと、特定の音が頻出すること、単語より短いものが多いこと、開始音が前母音とほとんど一致していること、また発話の途中にしか出現しないものがある傾向も観察できたこと（2）については、それぞれの談話のフィラーに異なりが見られること、ここから一方方向か双方向か、空間を共有するかしないかということが大きな要因になること（3）については、談話の開始部から中心部へ移行する箇所にフィラーの出現頻度が高いことが判明したことである。さらに談話におけるフィラーの位置は、談話の冒頭、発話の冒頭、助詞の後、換言・修正、倒置、引用の開始、助詞の省略、語の並列等のごときところに現れることも解明した。またフィラーを頻繁に使用する人し

ない人がいることも判明した。ここからフィラーは、「テクスト構成に関わる機能」「対人関係に関わる機能」「話し手の情報処理能力を表出する機能」という三つの機能があるということを提示したことは新しい見解である。このように、先行研究にはない新しい見解を示し、研究としてはまだ若い談話研究に有意義な新知識を示したことと従来にはない談話分析をしたことは高い評価が与えられるが、以下のような問題点の指摘もあった。

フィラーの音声面での長さの単位をどのように客観的に示しうるか、今後ビデオの使用をどうするか、人間の行動とフィラーとの関係をどう扱うか、言語とフィラーとの関わりをどうするか、つまりフィラーは言語かという問題の処理等、今後の研鑽に期待するとともに、重要な指摘があった。

その他文章の長さを適当に縮めた方が読み手にとって親切であるという指摘や、フィラーの日本語訳をどうするかという点などあったが、これほど具体的なデーターを豊富に扱った論文がないこと、観点がきわめて斬新であること、学界に寄与することが大きいこと等が長所として挙げられ、審査委員会は、本論文を博士の学位論文として認定することを、全員一致で合意した。